

ジャーナリスト同窓会 11月にシンポジウム開催 久世 篤

ジャーナリスト同窓生はすでに120名ほどに達しています。ジャーナリストグループとしては、これまで同窓会が組織されておらず、また仕事柄、多忙の方が多くことからフルブライト同窓会のさまざまな活動への参加も消極的なものにとどまっていた。しかし有志の発意により、ようやく94年4月に第1回の懇親会を開き、これまで4回、それぞれ30名前後の同窓生が集まり親交を結んできています。

95年に入り、フルブライトプログラムが50周年を迎えることもあり、ジャーナリスト同窓会として何かできないかとの話が持ちあがり、本年11月にフルブライト50周年記念シンポジウムを開催すべく準備に入っています。仮テーマは「日米関係とジャーナリズムの役割」。11月16日(土)10時より17時、会場は日本記者クラブを予定しています。構成としては基調講演(10:00~11:30)、昼食(11:30~12:30)およびパネルディスカッション(13:00~17:00)を考えています。

基調講演には大田昌秀沖縄県知事にすでに依頼していますが、パネルディスカッションの具体的なテーマや進め方は検

討中です。パネリストについては同窓生ジャーナリストに限らず、現職ジャーナリストや米国人ジャーナリストなども含め鋭意人選を進めています。

パネルディスカッションは通常よくみられるような数人の固定したパネラーの発言を聴衆が単に聞くという形ではなく、ジャーナリストの主権らしく、聴衆側からも積極的な発言が出て、収まりがつかないくらいの活気にあふれたものにするべく企画しています。知的格闘の場としたいとの願いです。このシンポジウムの案内は9月をメドにフルブライト全同窓生宛、発送したいと考えています。

また、50周年を記念して、ジャーナリスト同窓生を対象にアンケート調査およびフルブライター5世代(50年代~90年代)代表者の座談会を実施し、それぞれをまとめたものを近く発行する予定です。

ジャーナリスト同窓会による以上の活動は信原 尚武、松尾 秀助、小野 憲次、竹内 葵、久世 篤を幹事として、それぞれ小委員会を設け、作業を進めています。ジャーナリスト同窓会としては、これまでの不活発な活動を反省し、何とか以上の活動をまず成功させたいと努力しているところです。同窓生の皆さんのご支援をお願いいたします。

■Kuse, Atsushi 1979年、ジャーナリストプログラム、ハーバード大学/久世コンサルティング事務所代表取締役

事務局便り

●フルブライト財団奨学生

今回はフルブライト財団奨学生について御説明します。

同窓会では基金をしてフルブライトプログラムを支援しています。基金形態の一つは5年ごとに行っている同窓会会員を対象とした募金で、毎回5000万円くらい集まっています。もう一つは毎年行っている企業対象の募金で、主として国際的に活躍している大企業に毎年500万円寄付していただいています。500万円というのははだいたい留学生一人1年分の費用です。その他に東京で毎年、大阪で1年おきに日米交流チャリティゴルフ大会を開催してその寄付金が年1000万円近くあります(このチャリティゴルフ大会は日米教育委員会の伊藤智章さんに全面的にお世話になってきています)。以上合わせて、平均年1億円の寄付金を集めています。

フルブライト財団は寄付者に対して税制上の利益が得られるように作られた財団法人で、各地区フルブライト同窓会が推薦する同窓会員を理事・評議員として構成されています。

財団で集めた寄付金の大部分はアメリカ人留学生に使われています。これは日・米留学生の imbalance を是正する意図に基づいたものです。留学生候補者は地区同窓会を代表する10名の審査委員による審査委員会です。財団の奨学生に選ばれた者にはそれぞれ「トヨタ/フルブライト奨学生」というようにスポンサー名がつけられます。財団では片寄った専門的な分野の研究者よりも、大学を出たばかりで将来の日米交流の柱になるような人を主に奨学生として採用することを方針として、毎年約20名をフルブライト財団の奨学生として採用しています。財団奨学生に対する日常の世話見は日米教育委員会に委託されていて、財団奨学生も一般のフルブライト奨学生も全く同等に取り

扱われています。

なお、1997年はフルブライト同窓会会員を対象とする第4回個人募金の年になりますので、ご案内を差上げました折はよろしく御願いいたします。また、1996年度の日米チャリティゴルフ大会は10月21日(月)に神奈川県戸塚カントリー倶楽部で行われました。企業募金は50万円、100万円単位でいただいている場合や、企業グループでいただいている場合もあります。ご寄付くださる可能性があります折には、金額には関係なくご連絡ください。

●同期会・専門分野会

このような会合を企画するために宛名リストおよび宛名ラベルを希望されるグループの方は事務局にご相談ください。

●同窓会への寄付金

下記の皆様から1995会計年度中に同窓会宛の寄付金をいただきました。お礼申し上げます。

杉田倫明、越光男、神谷不二、神谷笑子、林伝一郎、福原達郎、浜崎卓彦、斎藤礼子、石和貞男、石渡裕政、飯野暢、早川俊一郎、松下公昭、小泉喜平(敬称略)

●事務局の移転

1994年1月から1996年4月まで同窓会員小林昌彦さん(青葉土地・青葉ビルディング社長、1962年度留学生)所有のマンションをフルブライト同窓会とフルブライト財団の共同事務所に無償でお借りして参りましたが、この度小林さんの都合で事務局を下記の住所に移転しました(電話・FAX番号は変わりません)。長い間お世話になった小林さんには記念品を贈呈しました。

新しい事務局には小さいながら応接室も用意しましたので、近くにお越しの際は是非お寄りください。また、同期会・専門分野会等の打ち合わせにもお使いください。

加藤弓弦(同窓会事務局長)



TOKYO GARIOA/FULBRIGHT ALUMNI ASSOCIATION

ガリオア・フルブライト東京同窓会

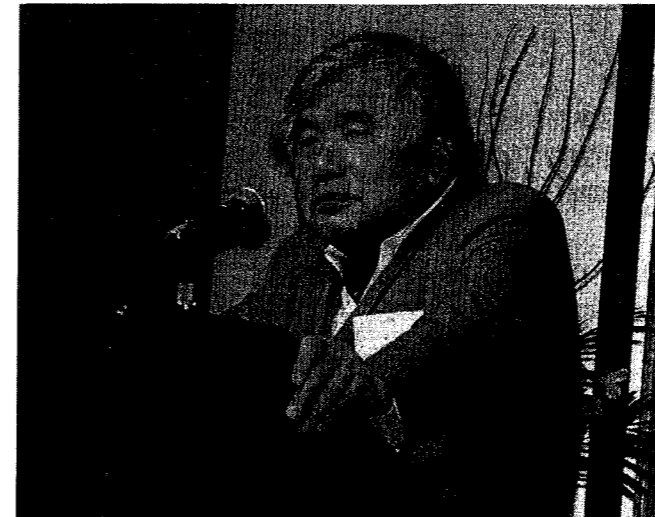
NEWSLETTER

No.9

DECEMBER 1996

小田実氏をゲストに1996年度総会

加藤 哲郎



東京同窓会総会ゲストとして講演する小田実さん



懇親会で挨拶する行天豊雄・東京同窓会会長

ガリオア・フルブライト東京同窓会の1996年度総会が、4月4日に開かれた。東京・新宿ヒルトンホテルに集まったのは130名以上、例年より多いという。実は私自身が、86-88年にスタンフォード大・ハーバード大留学から帰国してから、初めての同窓会参加であった。

若手研究者でフルブライトの恩恵を受けた人には多いと思うが、アメリカン・ライフを謳歌して帰国した途端に、たまっていた仕事が次々と飛び込み、留学での蓄電をアウトプットしなければならず、おまけに大学勤務者なら懲罰のごとくに学内行政に酷使される。

そんなわれわれを同窓会にひきつけるには、ゲストが魅力的でなければならない。学会で会えるのならわざわざ出かける必要はないし、テレビでおなじみというだけでは足は向かない。戦後生まれの現役研究者には、会費を払うだけの名簿会員がけっこう多いのではなからうか。

そんな一人であった私を、ヒルトンホテルに足を向けさせたのは、今年のゲストが小田実氏という案内をもらったから

である。「何でも見てやろう」は学生時代に世界への夢をかきたててくれた。ベ平連での活動は私の専門(政治学)の研究対象になる。阪神大震災の被災体験を聞けるのも魅力的だった。フルブライト同窓生のなかでは異端かもしれないが、フルブライト上院議員自身の世界平和へのコミットメントを考えれば、小田氏の登場は遅すぎたくらいかもしれない。

いつものラフなスタイルで登壇した小田氏のスピーチは、そんな私の期待に十分応えてくれた。自分の留学体験から説き起こし、ヴァイオレントだが共生社会であるアメリカと、安全といわれるが一枚岩的な日本を対比しながら、日米関係についても率直な意見を述べた。日米安保をやめて平和友好条約をという小田氏の提言には異論も多かっただろうが、むしろそうした提言の根拠を率直に示してくれたことで、会員からの質疑も活発だった。留学時以来という一緒にアメリカに渡った同窓生を壇上に招いての再会シーンは感動的だったし、行天会長と小田氏の握手は、この会でなければ見られないクライマックスであった。

そんなことで初めて出席したために、この会を企画し司会した早川与志子さん (Alumni Meeting 委員長) につかまり、来年度の総会企画を助けることになった。何をかくそう、これも同期生の日本的しがらみによるものである。

総会後の懇親会でも小田氏の意見には賛否両論があったが、それが世代のちがいと重なっていることが興味深かった。半世紀のあいだに、日米関係も留学の意味も変化した。来年

度の企画も、できれば率直でにぎやかな対話をひきだせるものにしたいと願っている。

■Tetsuro Kato 1986-87年若手研究員プログラムでスタンフォード大学政治学部留学 (1986-88年延長してハーバード大学イェンチン研究所) / 一橋大学社会学部教授 (政治学) / 東京同窓会 Alumni Meeting 副委員長

平和と共生 - 日米関係をいま改めて考える

(1996年度総会記念講演)

小田 実

1996年度総会での各種報告

1996/1997年度役員

- 会長：行天豊雄
- 副会長：白鳥正喜 (会長代行) 有馬朗人 小西輝明 松原亘子 高澤廣茂 安成子 田中哲男
- Foundation Liaison委員：堀江昭 / 担当副会長：小西輝明
- Alumni Meetings委員長：早川与志子 副委員長：加藤哲郎 / 担当副会長：安成子
- Hospitality委員長：太田隆次 副委員長：三上紀史 / 担当副会長：高澤廣茂
- Publicity委員長：西岡一正 / 担当副会長：行天豊雄
- Administration事務局長：加藤弓弦 / 担当副会長：白鳥正喜
- 監査役：堀憲明

1995年度会務報告

- 95.04.20 1995年度総会および懇親会。講演者は本間長世氏。出席者105名。
- 95.05.15 アメリカン・フルブライターのために最高裁判所及び国会の見学会。参加者13名。
- 95.06.04 アメリカン・フルブライターのために東京国立劇場にて歌舞伎鑑賞。
- 95.06.10 アメリカンフルブライターを成田空港に出迎え。
- 95.09.20 アメリカン・フルブライターのために半日ツアー (浜離宮-墨田川水上バス-浅草寺)
- 95.11.22 アメリカン・フルブライターのために2泊3日の宇都宮ツアー (日光東照宮、益子焼きなど)。参加者18名。
- 95.11.24 アメリカン・フルブライターの歓迎会。出席者121名。
- 95.12 Newsletter No.8 を発行。
- 96.03.12 東京同窓会役員会。

1995年度決算

収入の部		金額 (単位:円)	
会費	5,313,000	消耗品費	7,602
寄付金	77,000	地代家賃	374,185
受取利息	66,116	会合費	173,408
募金手数料	2,054,250	倉庫料	112,853
P C 賃貸料	240,000	事務用品費	86,257
		給料手当	2,616,355
当期収入合計(A)	7,750,366	奨学生費	245,827
前期繰越	11,125,872	支払手数料	12,882
収入合計(B)	18,876,238	図書購入費	0
		会議費	74,312
支出の部		雑費	293,141
旅費交通費	160,321	予備費	0
通信費	1,208,076		
印刷製本費	496,137	当期支出合計(C)	6,899,823
交際費	0	当期収支差額(A)-(C)	850,543
什器備品	1,038,467	次期繰越(B)-(C)	11,976,415

監査の結果、いずれも適法かつ正確であることを認めます。

1996年7月10日

監査役 堀憲明

1995年度募金結果

企業名等	金額 (単位:万円)
富士銀行	500
日本興業銀行	500
J E F	1,440
三菱グループ	500
住友グループ	500
モービル石油	500
トヨタ自動車	500
Y K K	1,000
J P モルガン	100
東京チャリティゴルフ	792
その他	127
合計	6,458

わたしがここに招かれた理由の一つは、去年NHKで放映されたフルブライトの特別番組にかかわったからだと思います。フルブライトの精神を生かすためにも是非番組を作りたいということで、わたしは「戦後日本の社会を作ったひとつの根幹部分にフルブライト留学生がいる。そういう人たちの中心にプログラムを作るなら協力しよう」と申し上げた。それでわたしの同期生を訪問することになった。

この同窓生は不思議な同窓生で、大学が一緒であるわけじゃないし、職業、思想、信条全部別々なんです。普通の留学制度だったら学術成績優秀な人を取ります。ところがフルブライトの素晴らしいところは、企業で勝手に生きてる人とかが勝手に応募してきて、わたしのような風来坊と一緒にいる。それが氷川丸に23日間、一蓮托生みたいになって乗って行って、アメリカで1年間暮らして、いろんなものをもって帰ってきた。それが戦後の日本社会の一つの根になっているだろうと思うんです。そういうことをこれからの日米関係の基礎に考えたほうがいい。

それ以来、アメリカとのつきあいは長いんですが、ベトナム反戦運動のかかわりで、ついにわたしは、フルブライトとは志を一にしなが、アメリカ政府のお尋ね者になって入国禁止同然にまでなった。その後も紆余曲折があって、今度は突然ニューヨーク州立大学の先生になって、2年間若い学生と暮らした。

そうすると、否応なしにアメリカの変化を感じますね。たとえば前に座っている学生を見ると、白人もアメリカの白人ばかりでなくて、この間ロシアからきました、ポーランドから来ました、そういう学生が座っている。黒人もカリブ海から来た学生とかアフリカから来た学生がごちゃ混ぜになっている。アジア人といっても日本人、韓国人から中国人、ベトナム人、フィリピン人まで並んでいる。

そういう学生に対して、日本とは何であるかを教えることにした。「Introduction to Japanese Studies」というのをわたしが勝手に考えて、日本歴史を全部教えた、と。まあ、煙に巻いたわけだけど、なかなかおもしろかった。いろんな反応が返ってくるわけで、目から鱗が落ちる体験もしました。

ポーランドから来た学生が「日本の天皇は神道ですか、仏教徒ですか」と質問するんですよ。なるほどなと思いました。

中世の歴史を見ると、神道の主祭者みたいな天皇が突然法皇になるでしょう。具合悪くなったら天皇をやめちゃって法皇になって、突然頭丸めたりする。考えてみたら、カソリックが突然イスラムになるような話です。やっぱりポーランドの学生だからわかるんですね。それはわたしにとってもチャレンジングな経験だった。

多様性がもたらすアメリカの「活力」

たくさん人間が価値観の多様性でやってきた、その点でやっぱりアメリカは偉いと思うんですよ。差別もしとるし抑圧もしとるけど、こんなにめっちゃくちゃにいろんな奴を入れとる国というのはヨーロッパにもないですよ。いろんな価値観持っていて変な質問をぶつけてくる。これはやっぱりアメリカの活力なんですよ。

そういう活力とわれわれはどうつきあうか。わたしはアメリカ理解というのが非常に偏っているような気がする。依然として。それはアメリカ体験をした人たちがそういう多様なアメリカを紹介していかないとけない。経済だけのアメリカとか軍事力だけのアメリカばかりやってきくと困る。その多種多様性が必要だと。

アメリカに行く3、4年前にたまたまテレビを見てたら、日米の対話でのサテライトを使ってやっとなんてですね。アメリカ側は黒人もいればヒスパニックもいる。日本側は並び大名みたいにごちゃごちゃいるんだけど、しゃべる人は3人だけ。そうすると多種多様な意見でないですよ。アメリカのおばさんが無邪気であって鋭い質問をした。「東京の普通のアパートの借り賃はいくらですか」と。ある意味では非常に重大な質問なんですよ、日本の住宅の事情はめっちゃくちゃですからね。そしたら、3人とも「I don't know, because I have a house」というんだな (笑い)。東京のど真ん中で「I have a house」といえるのは階級的にはものすごく上の人でしょう。なにゆうてんのやとおもてたら、見るに見かねて司会係のアメリカ人の新聞記者がちゃんと答えてましたよ。

アメリカには「I don't have any house」という人もいるし、失業の問題もある。それに対して日本の失業者も出てくる。黒人やヒスパニックが出てきたら、在日韓国・朝鮮人が出てくる。そういう話をせんと、日本はものすごくモノリス

ティックな国ですね。ものすごく偏ってるんじゃないか。それを痛感するね。政治問題を論じるよりも、基本的なつきあいが欠けてるような気がする。

わたしみたいな意見をいうと、あなたは日本人と違うと言われる。それで、わたしは決めました。「何ぬかしとんねん、おれこそが日本や」「I am Japan」ということに。「I am Japanese」なんていわん。天皇なんてしらん。おれがジャパンやと、国際会議行っていつもしゃべるとる。そういうふうにいるんなつきあいをしないとイケない。

フルブライト留学生はいろんな範囲に広がってる。だから、アメリカの活力をもとちゃんと伝えないかん、いろんなアメリカがあるんだと。

まず年代的にも変わってくる。わたしは1958年の留学生で、アメリカに初めて行ってびっくり仰天したことがあるんですね。日本だったら共産党や社会党が暴れる時代ですよ。ところがアメリカに行ったら何もないわけよ。アイゼンハワーの時ですから、保守反動の社会やった。しばらくしたらベトナム戦争を契機としてアメリカ左翼がぶわーっと出てきたでしょう。世代によったら、アメリカ行って左翼になった奴が山といるのね。

ベトナム戦争で「戦後」を迎えたアメリカ社会

戦後世界というのはどういうメルクマールがあるか。ひとつは、戦争したらいかんというのが何となく全世界に波及した。一番鋭く感じたのは日本とドイツです。ところがアメリカは被害がなかったから正義の戦争があると信じていた。それが、正義の戦争なんかないんじゃないかと言い出したのがベトナム戦争のころです。ベトナム戦争ではじめて、アメリカに「戦後」がくるんですね。

もうひとつ戦後世界のメルクマールに、植民地がなくなった、あるいはなくなりつつある方向にあった、ということがある。これも大事なことです。日本ももちろん植民地を失った。ヨーロッパも。それで初めて民主主義ができるようになった。民主主義はそれまでは絵に描いた餅ですよ。植民地の人には民主主義なんかない。戦後世界になって初めて民主主義を作りうる土台ができたとなつてわたしは理解する。

ところがアメリカは遅れていた。ベトナム戦争といっしょになって公民権運動が起こることによって国内植民地がなくなったんですよ。たとえば1958年にわたしは南部全域を旅行したんです。それは公然たる差別の社会でした。たとえば黒人は駅の待合室からレストランから全部白人とは違う。日本人はそういうところでは白人扱いでしたが、日本人と白人の結婚が違法だった州がたしか3州あった。つまり国内植民地を持つってんですよ。それがなくなるのが公民権運動とベトナム戦争の時で、そこでアメリカ社会は変わるんです。

ただ、アメリカは暴力社会ですね。と同時に共生、異なっ

た価値観で生きなあかんという点でアメリカは非常に優れた社会です。日本社会は、戦争を経てやはり暴力はいかん、非暴力で行かなければいけないということを基本理念として持ちつつある。暴力に対しては非暴力でやろうという点で優れたものをもっている。そのかわり共生の観念では劣った社会です。日米関係を考えるときに、どっちも素晴らしいところを出さないかん。片方は共生社会として異なった価値観の共生を志する社会である。それはアメリカの活力である。しかし、その活力をつぶしていくのが暴力社会である。文句があったら倒せみたいところは依然として残っている。中南米政策を見てもそうですね。しかし彼らのメリットというのは、いろんな価値観があることを積極的に認めようと積極的にやってくる。

日本国はどうかというと、暴力はやめよう、平和主義でいこうということは一生涯懸命言ってるんだけど、それを実践せないかん。もうひとつは、異なった価値観でいろんな民族が生きていることについての認識が浅い。先進世界の中で一番浅い。日本はそこをしっかりとしなければいけない。

そういういいところを出し合うような日米関係を作らないかん。今の状態でいくと、どっちもマイナスばかり出してるような気がする。

最後に政治的提案をすれば、日米安保条約はいっぺんやめた方がいい。だいたい、軍事条約が基本条約にあるというのはおかしい話なんです。片方に平和憲法があり、片方に軍事条約がある。日米関係の基本条約は、どんなに美辞麗句をやっても、軍事条約なんです。やはり日米安保はいっぺん止めて、日米友好平和条約を結ぶ、そのうえで軍事的関係をどうするかを話し合ったらどうか。いまの関係は占領政策の名残でしょう。そのひずみが山と来ている。

たとえば日中友好平和条約というのはひとつのいい条約なんです。「覇権を求めず、求められず」という関係を作ったうえで、これから両国の関係をやろうじゃないかという条約です。もう一つ大事なことは日中友好平和条約の前に、日中友好をしようじゃないかという国民的運動が、商売の話も含めて、わんさとあった。貿易の関係から文化の関係からいろんな人が努力してきた。そのうえで形成されたのが日中友好平和条約なんです。これはひとつの模範的な例だと思う。

日米関係のいろんなつながりの上で日米友好平和条約をいっぺん作るべきだと思う。そのうえで、軍事的な連関を作るにはどうしたらいいか。軍事条約が先行すると歪んでくる関係です。その歪みの象徴が沖縄ですよ。そこのところはわたしたちが根本的に考えなければいけない、日米関係の基本だと思う。そういうことにおいてフルブライトの仲間たちが、ひとつの根になりうるんじゃないかと思うんです。

■Makoto Oda 1958年度ハーバード大学留学/作家

NHK・ETV特集「フルブライト留学の半世紀」ができるまで 飯塚純子

昨年12月に放送されたETV特集「フルブライト留学の半世紀」は2本の番組で構成されています。「第1回 平和と民主主義の精神」と「第2回 小田実・同期生を語る」です。第1回は、小田実さんがアメリカでフルブライト氏の足跡を辿りながら彼が留学制度に込めた思いを描くもの、第2回は、小田さんが1958年の同期生5人を訪ね、それぞれの経験とその後の影響を語り合う内容でした。

この番組はいくつもの要因が重なって実現したのですが、なかでも大きく影響したことは、フルブライト氏がなくなった去年が奇しくも戦後50年であったというタイミングです。スミソニアン博物館の原爆展示論争を起こっており、国際交流を通じて平和を希求したフルブライト氏の理念を思い起こすことの重要性が増していました。

番組を作るに当たって思い出したのは小田さんのことでした。御多分にもれず私も15年近く前『何でも見てやろう』の洗礼を受けました。この本を通してフルブライトプログラムの存在を知った私にとって、フルブライトといえ小田さんでした。さらにNHKの資料室で日本のフルブライトプログラム20周年のニュース番組を検索したところ、小田さんがインタビューに答えて「ベトナム戦争に反対したフルブライト氏の忠実な弟子が自分である」と、あの鋭い眼差しでカメラを睨みつけながら言っているのを聞き、決心を固めました。

小田さんに出演のお願いをした去年5月、小田さんはいつもにまして怒っていました。阪神大震災の発生によって、それまでの日本の経済や政治の矛盾点が一気に噴き出し、被災者の一人であった小田さんはその渦中にいました。小田さんは、「大震災の中で見えてきたいちばん大事なことは『殺す



番組取材のひとつコマ。小田さんの同窓生のひとり、三井優子さんを訪ねる。中央が筆者の飯塚さん。

な』と『共生』ということだ」と書いています。この2点こそ、小田さんがフルブライト留学で学び信ずるに至った民主主義の基本でした。フルブライトプログラムを通して民主主義を考え直したい、という私の提案に小田さんは賛同してくださいました。

当初、私は小田さんが著名フルブライター数名と対談する、という番組形式を考えました。ところが小田さんから、著名人よりも「普通の人」と話をするところこそ、日米関係の根を見つめることになる、という指摘を受けたのです。たまたま小田さんが留学した1958年度の全額給費生は団結が固く、毎年同窓会を開いています。小田さんから同窓生の消息をうかがうにつれ、小田さんと同窓生の対談で番組が作れる、と直感しました。

小田さんは以前、「アメリカへ向かう氷川丸に同乗したフルブライト留学生はまるで日本の縮図だった」と書いているのですが、38年たった今でもその同窓生たちの多様さは変わっていませんでした。その中から5人を選ぶことは、もしかしたら今回の番組作りでいちばん難しかったことかもしれません。

番組作りの醍醐味は人との出会いにあります。今回も国内外で素晴らしい人々と知り合うことができました。特に、私も同じフルブライターであるという、年齢やバックグラウンドの違いを超え、古い友人と会っているような錯覚に陥るほど親しくお話をさせていただきました。今回ほど出演交渉の容易な番組作りはもう二度とないと思います。フルブライト氏やプログラムについて語ることをためらう人は、一人もいませんでした。

しかし、一般的に物事の「功罪」を描いて初めて番組が成り立つことを考えると、「功」しか考えられない今回の番組の構成には工夫が必要でした。フルブライト氏の単なる偉人伝にしないために、フルブライト氏という縦軸に、小田さんの力を借りながら、民主主義、平和、日米関係、戦後50年、といった横軸を紡いでいったつもりです。

フルブライト氏やフルブライトプログラムを扱う番組の作り方は無限にあると思います。同じように、フルブライト留学生の経験も多岐にわたり、プログラムへの思いも多様なはず。その点、小田さんと同窓生を番組の主人公にしたこの番組の切り口は、かなり狭いものです。あえて、将来への提言を声高に唱えることも止めました。もしこの番組がフルブライトプログラムの理念や、平和のあり方についてもう一度考えるきっかけになり、未来への礎にでもなったら、こんなに嬉しいことはありません。

■IIZUKA, Junko 1990年大学院留学 ニューヨーク大学大学院ジャーナリズムスクール/NHKエンタープライズ21 スペシャル番組部プロデューサー